

★文楽鑑賞会★

初めての試みとして、文楽鑑賞会を実施しました。学習者、ボランティアあわせて、20人が参加しました。その感想を、アメリカ人のリズさんに書いていただきました。日本文、英文ともご自身で書かれたものです。その文章力にも感心です。



<文楽を見て>

7月26日、私はアメリカの友人と市岡のボランティアさん達と文楽に見に行きました。文楽を見るのは、初めてでした。

まず、私たちは人形の使い方を習いました。そして、私は人形を使わせてもらいました。おもしろかったけど、人形は重いし、使いにくいと思いました。その後、シアターでパフォーマンスが始まりました。いくつかの人形は3人で一緒に動かして、ほかの人形は一人で動かしていました。すごく難しそうでした。パフォーマンスのお話は孫悟空についてでした。とてもおもしろかったです。パフォーマンスが終わってから楽屋に行って、人形を見て写真を撮りました。

良い経験をしたと思いました。また、もう一度見に行きたいです。

On July 26 I went to see a Bunraku performance with an American friend and some of the Ichioka volunteers. It was my first time to hear of or see Bunraku. Initially we were given a lesson in how the puppets (dolls) worked. And then we were invited to try using one of the puppets. It was interesting to try using the puppet myself, but I found that it was heavier and harder to use than expected. After the short lesson, the performance started on the main stage. Some of the puppets were controlled by three people and others by only one person. It looked really difficult. The performance was about the story of SonGoku and was very entertaining. Following the show we were allowed to go backstage, to look at all of the puppet characters from the show, and to take pictures. Overall I thought this was a really good experience. I would definitely go again.

LiZ Welsch

5班 リズ・ウェルチ

★夏期研修会★

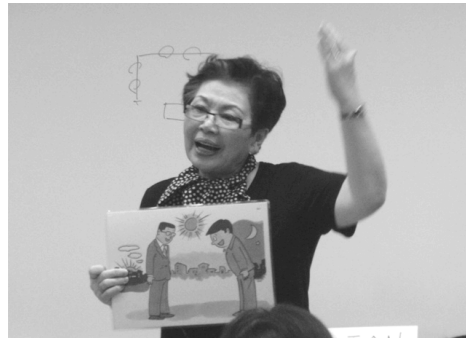
『わかりやすく日本語を教えるために』

財) 京都日本語教育センター 西原純子先生

●8月1日

- 1 指導に先立って、学習者のニーズや日本語に限らず外国語学習経験の有無や予習・復習の時間が取れるかどうかの学習環境や経済基盤など、各学習者についてできるだけ綿密なカルテを作ることが必要です。そのことによって、指導の重点の置き方や目標なども変わってくるからです。
- 2 「日本語はむずかしい」とよく言われますが、日本語の特色を「日本語のおもしろさ」と感じられるような指導の仕方を工夫したいものです。
- 3 日本語の構造には次のような特色があります。
 - ①名詞中心の言語であること。
「私は西原です。」という表現を例に採りましょう。英語なら“ I am Nishihara.” の“am”を省略することはできませんが、日本語だと「～です」はなくても意味が通じますね。こんな言語は他にあまりありません。
 - ②時制が単純であること
「～だ、です」と「～だった、でした」の二通りだけです。
 - ③自動詞・他動詞の別がある言語であること
 - ④やり手と受け手の関係や、両者の心理的距離を重視する言語であること。
日本語のそんな特色を「おもしろい」と感じるように指導したいものです。
- 4 外国語を学ぶのは、構造も表現の仕方も母語（第一言語）と違うから面白いのです。指導者自身がそう感じる事が指導の出発点です。
- 5 実際の指導に先立って、次のような準備をしましょう。
 - ①教室用語について、日本語と学習者の母語の翻訳を対照した一覧表を作って配りましょう。例えば、「聞いてください。」「待ってください。」「どうぞ～」など。
 - ②先生についての情報を充分与えるようにしましょう。
- 6 指導するとき、次のようなことに留意しましょう。
 - ①板書や絵カードを最初に示すのは邪道です。まず、「聞いてください」と言って、正確な発音で5、6回指導者が話して、その上で学習者に発音してもらいましょう。最初に正確な発音を覚えなかったら、中、上級者になっても発音の矯正は非常にむずかしいこととなります。
 - ②学習者の発音をなおすのは2回にとどめましょう。あんまり何度も矯正すると、日本語の発音は難しいという先入観を与えてしまいます。そのためにも、指導者が「聞いてください。」と言ったら、静かに集中して聞く習慣を身に付けさせたいものです。「話す」ことよりまえに、正確な日本語を「聞く」ことを重視してください。
 - ③学習者自身が自分でルールを発見するようにさせたいものです。あまり先回りしてルールを教えると、自らルールを発見する楽しさを奪うことになってしまいます。
 - ④既知っている日本語知識を学習者に出させて、その上で、もっといい言い方を教えるようにしましょう。
例えばお菓子を見て、「おいしいです。」→「おいしいでしょう。」→「おいしいと思います。」まで学習者が言うてから、「まだ食べていないときはもっといい言い方があります。それは『おいしそうです。』という言い方です。」のように指導したほうが、「おいしそうです。」という表現が身に付きやすいです。
- 7 以上のようなお話の後で、日本語をまったく知らない学習者を対象にした第1回目の授業の模擬授業がありました。とても生き生きとしたものですが、それを再現するのは無理です。で、気が付いた点だけをメモします。
 - ①西原先生は終始にこやかに授業なさいました。学習者が親しみを持ち、リラックスして学習するためにとっても重要なことだと感じました。
 - ②授業は「おはようございます。」という挨拶から始まりました。特に長音に注意しながら5回繰り返しました。夜の場合「コンバンワ」と言わざるを得ないけれど、「ン音」はむずかしいので注意してください、という指摘もありました。
 - ③次は「わたしは西原です」という自己紹介です。自分の胸に手を置いて「わたしは」と言います。鼻の頭を指差すと、鼻のことを西原というのだという誤解を招きがちですから必ず胸に手を置くように、という指摘もありました。学習者が自己紹介する場合、先生は学習者の後ろへ回って、肩に軽く手を置いて「わたしは」と発音してから、学習者が自分の名前を言うようにさせます。
 - ④自分の名前が紹介できるようになったら、次は、隣の人の名前の紹介です。「こちら（この方）は〇〇さんです。」次は「私は日本人です。」「こちら（この方）は中国の方です。」というように、国名の紹介を合います。さらに「こちら（この方）もアメリカの方です。」のように「も」の使い方の練習もしました。

模擬授業はなごやかな雰囲気の中で進みました。いつの間にか予定時間になりました。



●8月8日

第2回目は、日本語の構造と指導上の留意点についての講義でした。講義の主な内容のメモの一部を、以下に記します。

- 1 名詞中心の言語ということ
 - ①これは本です。→「です」はなくてもいい。
 - ②これは私の本です。→「私の」が必要な情報。
今日は暑いねえ。→「今日は」も「ねえ」もなくとも、必要な情報は伝わる。
- 2 「これ、それ、あれ」の使い方のこと
 - ①「これ」は近称、「あれ」は遠称のような説明をすると、正しい理解ができなくなる。
 - ②「これ」は話し手の側のもの、「それ」は聞き手の側のもの、「あれ」は話し手・聞き手の外側のもの、といった説明を具体的なアクションなどで理解させる必要がある。
- 3 形容詞の導入と練習のこと
 - ①まず、反対語のあるイ形容詞から導入。
例：大きい⇔小さい
 - ②眼で見てわかる、相対的に比較できるものから導入。例：長い⇔短い
 - ③イ型形容詞を続けて長い句を作る練習をする。ナ型形容詞はイ型形容詞の後に練習する。
例：この新しい、大きいカバンは私のです。
※新しく習得させたい語がある場合、必ず、その他の語はすでに知っている語を使う。
 - ④ナ型形容詞の場合、「きれいな」と「ゆめいな」はイ型形容詞と間違えやすいので、これらは「きれいな」「ゆめいな」になることを理解させること。
- 4 名詞を中心に文を組み立てていくよう練習すること。

例：本→この 本→この 新しい 本→この 日本語の 新しい 本→昨日 梅田で 姉と買った この 日本語の 新しい 本
- 5 授受動詞（あげる・もらう・くれる 等）の指導のこと
 - ①「あげる」と「くれる」は、主語は同じ。受け手が違う。
例：田中さんが山本さんにあげる。 田中さんが私にくれる。
※「くれる」の受け手は、自分または家族など自分の身内。
※このような表現の指導は、指導者と学習者が1:1ではやりにくい。
 - ②「やる」は現在では「花に水をやる」「子供にお菓子をやる」といった表現をほとんどしなくなっている（「あげる」を使う場合が多い）ので、教える必要はない。

日本語のテンス（時制）、アスペクト（局面）、自動詞と他動詞などについての指導法も当初は予定しておられたようですが、残念ながら時間切れになって、西原先生のお話を伺うことはできなくなってしまいました。

<講演を聴いて>

6班 中原英三郎

先生は最初に、母語と構造や発音が違うからむずかしいのではなく、違うからこそおもしろいのだ、とおっしゃいました。まず、その一言で講義に引き込まれました。学習者が「おもしろい」と感じるような指導の仕方を学びたいものだと思います。

わたしは入門段階の学習者を指導した経験がほとんどありませんので、「初めての授業」の模擬授業は、特に勉強になりました。先生は、入門段階で正確な発音を身に付けさせるためには「聞く」練習が大切だということを強調していらっしゃるんですが、確かにそのとおりです。中・上級になってから発音を矯正する難しさは私も日々実感した経験があるからです。日本語の音韻構造は単純だと言われているけれど、長音、撥音、促音のない地域の学習者の発音を矯正する苦勞は、以前私もさんざん味わいました。ほんとに最初が肝心です。

先生が自信に満ちた態度でにこやかに授業していらっしゃる姿に、教える者のあるべき姿を見たような気がしました。先生が学習者の後ろに立って、肩に軽く手を置きながら、「私は〇〇です。」と自分の名前を紹介させるやり方を示していらっしゃる時には、「男性の場合、女性の学習者の体には手を触れてはまづいだろうなあ。ぼくならどうするかなあ。」などと考えたりもしました。

初日の講義はあっという間に終わりました。それほど楽しく充実した時間を過ごすことができたのでした。

二回目の講義は、日本語の構造と指導上の留意点についてでした。「コソアド語」のこと、形容詞の導入と練習のこと、授受動詞（あげ、もらう表現）のことなど、多くのことを学ぶことができました。特に印象深かったのは、現在は「やる」という表現をあまり使わなくなっているのを教えずともいい、という指摘でした。日本語教師の中には、伝統的な日本語にこだわり過ぎて、現在ではもう一般的ではない言葉遣いや振る舞い方を過度に強調して、日本語嫌いを作っている人もいないのではないと感じていましたので、とても共感を覚えられました。

日本語のテンスやアスペクトの指導法について、時間切れでお聞きすることができなかったのはとても残念でした。もし機会があれば、それらの点とともに、「やり手、受け手の関係・距離を重視する」日本語の特色についての指導法も教えていただきたいと思いました。西原先生の長く深い日本語教育の経験を踏まえた3時間の講義はとても刺激的でした。多分わずかな謝礼しか差し上げていないのでしょうか。ボランティア精神で何度も来ていただいた西原先生と、招聘の労を取られた係の方に感謝の気持ちでいっぱいです。